

日本獣医史学会創立50周年記念

——歴史と展望——

小佐々 学

日本獣医史学会が創立50周年記念を無事に迎えましたことは、会員はじめ関係各位の皆様方の長年にわたるご協力とご支援の賜物であり、ここに厚くお礼申し上げます。

本学会は昭和47(1972)年に設立された「日本獣医史学研究会」が、昭和51(1976)年に「日本獣医史学会」と名称変更して存続しており、令和4(2022)年が創立50周年記念である。

1. 日本獣医史学会設立の経緯

獣医学の歴史を後世に伝えることの重要性を痛感された東京大学名誉教授の故・田中丑雄氏(1889～1982年、元・東京大学農学部長、東京農工大学学長、日本大学獣医学研究所長)が、『日本獣医学史』(文永堂、1944年発行)の著者である文永堂の故・白井恒三郎氏(1899～1992年、筆名・白井紅白、当時『獣医畜産新報』編集主幹)に獣医史学に関する研究会の設立を提案したのは、昭和45(1970)年の秋であったという。

それから2年後の昭和47(1972)年6月24日に、日本獣医史学研究会の設立総会が開催され研究会が発足しており、田中丑雄会長が選任された。その後、昭和51(1976)年6月に、研究会が学会に改組されて日本獣医史学会(田中丑雄理事長)となり、今日に至っている。

2. 日本獣医史学会の沿革

(1) 歴代の理事長

初代：田中丑雄(東京大学名誉教授、1972年～)。二代：石井進(元 農林水産省家畜衛生試験場長、1983年～)。三代：添川正夫(元 北里研究所名誉部長、1986年～)。四代：黒川和雄(日本獣医畜産大学名誉教授、1992年～)。五代：深谷謙二(元 文永堂出版(株)編集企画部長、2007年～)。六代：小佐々学(元 旭化成(株)研究開発部長、2010

年～)。七代：小野寺節(東京大学大学院 農学生命科学研究科特任教授、2020年～現在)。

(2) 本学会の構成(2022年10月現在)

会員・役員など：正会員、学生会員、評議員、理事8名(うち理事長1名・常務理事3名)、監事2名、顧問3名、名誉会員13名、賛助会員6団体、広告掲載2社。業務部会：企画、庶務、財務、編集、広報、研究発表会、会員関係業務、国際関係業務、編集委員会。

(3) 総会・研究発表会・機関誌

総会：年1回春に開催。研究発表会：年2回春秋に開催。機関誌：年1回発行。創刊号～第7号『日本獣医史学研究会報』、第8号～『日本獣医史学雑誌』(2023年2月：第60号発行)。

(4) 他学会との交流

世界獣医史学会(WAHVM: World Association for the History of Veterinary Medicine)に1992年加盟、発表・講演を行っている。日本医史学会と日本薬史学会との三史学会合同例会に1998年から参加。その後に六史学会合同例会に発展。

3. 獣医史学教育の過去と現状

従来の獣医学教育では国立大学と私立大学の各数校で獣医史学(獣医学史)の講義が行われていた。その後、獣医史学の講義が国家試験とは無関係との理由で廃止されたが、日本獣医生命科学大学1校だけで講義が存続した。

平成23(2011)年に全国大学獣医学関係代表者協議会は、国際レベルの獣医学教育の施行と人材教育のために、「新しい獣医学教育の方向性と獣医学教育者の責務に関する声明」を発表した。教育研究体制の充実のために、①共同学部を目指した共同教育課程の推進、②新コア・カリキュラムの実施、③分野別第三者評価体制の確立、④共用試験の導入と臨床試験の改善の4つの柱をたて

て、ロードマップを提示した。

平成23年度版の「講義科目1-1 獣医学概論モデル・コア・カリキュラム」によれば、「全体目標：獣医学概論は、獣医学の役割と全体像を明確に把握することが目標である。概論では獣医学、獣医療、獣医師に求められる獣医哲学を学ぶ。獣医学では人類と動物の関係における獣医事の歴史的考察と、日本の獣医教育史を学ぶ。（以下略）」とある。また、「(1) 獣医学概論の理念 (略)」に次いで、「(2) 獣医史学 一般目標：海外および日本における獣医事の歴史的概要を習得する。到達目標：1) 古代における動物と人類の関係、動物の家畜化と獣医療の発祥、軍馬の起源について説明できる。2) 近代獣医学の発達過程を説明できる。3) 日本の獣医療について発達過程と特色を説明できる。」とある。以上のように、「基礎獣医学分野」の「獣医学概論」に「獣医史学」が必修科目として含まれており、教育目標が明確に記述されている。

4. 獣医史学教育と日本獣医史学会の展望

新コア・カリキュラムの制定により、基礎獣医学分野の獣医学概論に獣医史学が取り入れられ、平成25(2013)年度の入学生から獣医史学が必修になり、獣医学教育における獣医史学の位置づけが明確になったのである。このことから、獣医史学研究の進展と共に、日本獣医史学会の今後の活動が期待される状況にある。(日本獣医史学会 顧問兼名誉会員)

参考文献：

- ・小佐々学：「第2章 獣医史学」，池本卯典ほか監修『獣医学概論』，緑書房（2013）
- ・深谷謙二：「日本獣医史学会—その設立と30年の歩み—」，『日本獣医学雑誌』第41号（2004）
- ・日本獣医学人名事典編纂委員会：『日本獣医学人名事典』，日本獣医史学会（2007）
- ・日本陸軍獣医部史編集委員会：『日本陸軍獣医部史』，紫陽会（2000）
- ・日本獣医史学会ホームページ [http://jsvh.umin.jp]（令和4年12月6史学会合同例会）

レプラと奇跡 脱神話化と脱医学化に向けて

堀 忠

ツァラアトは、旧約（ヘブライ語）聖書に少なからず見られる、翻訳困難な単語のひとつである。ツァラアトはヘレニズム期に成立した旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）でレプラ（λεπρα）と訳され、新約（ギリシャ語）聖書にもそのままレプラとして登場する。それがさらに後年、レプラ（lepra）としてラテン語の語彙に定着し、いつしか古代ギリシア医学のエレファンティアシス、近代医学のハンセン氏病に比定されるようになった。しかし聖書時代のツァラアト・レプラと、近代医学のレプラ（ハンセン氏病）との連続性・同一性については従来さまざまな異論があり、とりわけ中世以降のヨーロッパ社会で治療不可能な忌むべき病、いわゆる「業病」として注目され忌避されるにいたるまでの言説史には不明な点が多い。

著者は近年整備の進んだギリシア語文献のデータベース（Thesaurus Linguae Graecae[®], University of California, Irvine.）に依拠しつつ、この語をめぐる言説史の一端の再構成を試みた。

翻訳は翻訳者に備えられた語彙の範囲で行われるものであり、また解釈のない翻訳はありえない。七十人訳レビ記の翻訳者は、レビ記13:2-3の基本的な問題設定「いかなるネガーがツァラアトのネガーであるか」を「いかなるハフェー（ἀφή）がレプラのハフェーであるか」と翻訳した。古代ギリシア医学において、ハフェーは通常触覚一般を意味して用いられる語であり、重大な身体病変に用いられる語ではない。皮膚を冒す重大な病変に用いられる語としてはヘルコス（ἔλκος）があり、七十人訳聖書ではこの語がヘブライ語シヒーン（ヨブ記のヨブ、列王記のヒゼキア王、出エジブ